

所も舊事紀の如くにして、一説に赤鯛と云るされしをば、讀てアカダヒと云ひしなりさらば此物の名は太古の時には、アカメといひしを、後にはタヒと云ひし也、アカメといひしは、アカは即赤也、メとは太古の俗禽魚類を呼ぶに、メと云ふ詞をもてせし常の事也、また後にタヒとよびし事は、三韓の方言によりしと見えたり、即今も朝鮮の俗、此魚を呼びてトミと云ひ、道味魚の字を用ゆ、其トミといふは、彼國のいにしへタヒと云ひし語の轉せしなり、中略鯛の字をもて魚名と廣益玉篇に鯛魚名と注し、鄭望膳夫錄に、繪莫先於鯛魚、編鮎鯛鱧次之と見えしのみなり、其餘訓詁之書の如きは、鯛字或は收め或は收めず、禹錫食經既に失ひたれば、其全書を見るに及ばず、倭名鈔に引用ひし所をも、世の人疑ふ事に成たり、我幼き頃ほひに、或人閩書の南産志に、嶺表異録興化志、宋志、海錯、疏等を引て、去れ、棘鬣、吉鬣、鬣鬣、奇鬣、過鬣などいふ名ある者をもて、此にタヒ注引ふもの即是也、按長箋它魚不、然疑爲鱧魚、宜訓通魚、鼻端脆骨と見えし注せば、遂に鯛字を舊注引ふもの即是也、按長箋它魚不、然疑爲鱧魚、宜訓通魚、鼻端脆骨と見えし注せば、遂に鯛字を或は殘缺の字ありし未詳などいふに、然疑爲鱧魚、宜訓通魚、鼻端脆骨と見えし注せば、遂に鯛字をけり、漢に思はれず、古に亦然ぞあるべき、さらば宋時南方の俗、名づけ云ひしを待て、始めて其名あり過脹等の名ありしは、又各其方言に依りしとこそ見えたり、閩書等の者に見えし所も、棘鬣似鯛而大其鬣如棘、紅紫色と見えたり、禹錫食經にも、似鯛而紅鱗者也といひき、これかれざるを、棘鬣似鯛而見たりと

〔隨意錄〕五 鯛都僚切、又丁聊切、並音雕、字書唯云魚名、亦不註何魚、方俗訓曰多伊、予田虎未嘗之解、南嶺子云、日本書紀書海鯽魚、紀仲哀 延喜式稱平魚、閩書之棘鬣魚也、今俗用鯛字、取乎平魚、以爲多伊蓋略多伊羅之方言也、

〔物類稱呼〕二 棘鬣魚、たひ 豊前にてへいけと稱す、蟠龍子曰、鯛をへいけと云は、平魚なるべし、延喜式に平魚、今按に東武にて辨慶鯛といふ物を、肥前唐津などにては、へいけと呼、又土佐の海にへうだひと云、其子をへうごと云有、是も平魚の轉語なるべし、

櫻鯛、堺鑑に、櫻鯛、泉州の名産なるよし見え、麥藁鯛、中國四國ともに四月出る鯛を云、前の魚津の國にて稱す、攝州、西宮、社前、の海上にとる物を前の魚、甘鯛、畿内西國、東武共にあまだひと呼、出